

# A 3 ストックホーム ムの亡霊

オペレーター 冒険小説

著； インチ・バイ・インチ

# A3ストックホームの亡霊

A3ストックホームとはG銀行で使われてるA3サイズの連続用紙のことです。A3ストックホームはよく破ることはあるのですが、陳ハレータが破った時何が起きたのか！はいかに！

## 一章 A3SFの破損

A3SF(えいさんストックホームと呼ぶ幅広の連続用紙です。完璧商人)の破損が起きたのはある春の日だった。

I/O(アイオー・・・印刷作業のメンバー)は朝一の作業を毎日のように行っていた。  
陳さんは4000型プリンターのテストパターンをたのまれた。  
メンバーは4人。IBM4000型は4台ある。  
陳さんはコンソール(操作卓)に向かい、”テスト4000”のコマンドをたたいた。  
このテストパターンは印字がうまくのるかどうかがドラム全体で出力するため幅広のA3SFが使われる。  
が、この日は『バリバリバリ！！』  
見事にジャムったのだ。

そしてなぜか、パターンじゃなく文字が・・・

『あ』陳さんは呆然としていた。

なぜ、朝の”テスト4000”で夜間のRクラスがでているのだろう！  
こんなのは絶対、上のひとのミスだ。なにかのまちがいだ。おかしい。  
『ばあはあ、くく』  
陳さんはあわてていた。

このRクラスはジョブというプログラムを流したときの結果をしりたいため  
I/Oのオペレータに出力を依頼してるのだが、(A~Zクラス。0~9クラスといろいろある。)しかし、仮に朝流したにしてもテストにのるはずがない！！

さあ、陳さんのミスになってしまうのか？

## 二章 謎のジョブの解放

陳さんは他のオペレータの意見もきかず電話した。  
『変だな。陳さんスプール(印刷データのたまる空間)のものよくみないでうっちゃったんじゃないの？』  
『。。。。』  
上のひとは適当ともいえる電話のまわしりだった。  
運営から、年金へ、年金から今度、なぜか分散に・・・  
『じゃああるライブラリのもの(ジョブ)をコマンドでシステムに登録し解放してくれ。ライブラリ名は・・・』

陳さんは言うとおりにした。

たちまち、コンソールログ(画面上のメッセージなど)が三つのコンソールで異変が起き、MVS(大型計算機)が三つともおちてしまった。

陳さんは一オペレータとして凍り付くばかりであった。

## 三章 せまりくる危機

シフトリーダー(三交代勤務なのでこう呼ぶ)が真っ青な顔してとんできた。

『今日はもう帰れ。そのうち呼び出すから静養してろ！いいか。ソープいってる場合じゃねんだぞ！』

『はい・・・』

帰宅途中、エレベーターで一階におりたが、気になって四階にもどってみると、マシン室に運営の屈強なメンバーが詰めかけてた。オペレーション責任者と、関係者をつかまえて尋問するんだろう。システムをまもるための暴力にぞっとした。

しかし、三日後、陳さんはヘルスにいったのだが・・・

五日たって、裁判所から呼び出しがあった。連帯保証人と、東京裁判所 ведь。『被告はG銀行(陳の職場だった。)のコンピュータH系をソフト的に操作不能にした。』『よって一億の損害賠償金をM銀行に支払うことを命ずる。』

陳『終わった・・・』

## 四章 死闘

陳は飲み歩いてた。

『いちおっくはむりっぴよ、、たちゆけてそこのおねーちゃぶ。』

おそろしいことに本当にピンサロの子のおしりに一発で指いれたりして3軒の店を出入り禁止になってた。いやはや陳のプライベートおそろべし。

しかし、オペレータの目はネオンを縫うように近づく黒影をみのがさなかった。刃渡り20センチのナイフをコートに隠しもっている。陳は一瞬身体をさばき、袖きりざまに反転し小手返しで投げた。三頭筋が切れ、血が地面におちた。極めざまへしおって、キズを押さえながら、陳は『なぜむかってきた？』ときいた。彼はつぶれた小さい銀行の店長だった。恐ろしいことに、陳の名は銀行界に知れ渡っていた。"トルネードジョブ"を流した男。『なんだ？』

## 五章 復讐への誓い

トルネードジョブとは、最新のウイルスでMVS(大型計算機)から走ったジョブが、分散機(サーバ)を経てネット上を荒らしまわり預金残高のつじつまをあわせてデータを差し引きけずりとして元の銀行に返ってくるというもの。発信者は指定額、のちに振り込みをうけることになる。

陳の意識が遠のく。すると俺はトルネードジョブのコマンドをうたされたんだ。

同時にH系のソフト的崩壊のトリガーをひいた。H系はもう使い物にならないくらい古いMVSでデータは多くてもがらくた同然だった。畏だったのか！すると、はじめのA3SFの"テスト4000"ジョブもあの時かきかえられていたことになる。要らないRクラスがのるよにすりかえられたんだ。でもなぜじゃむったんだ。まさか、疑いがでないようにマイクロコード(機械信号)まで・・・帰ってくると、家に第一回の振り込み依頼がきていた。生活の道はとざされた。彼は人もころしてないのにこんな金額を・・・ころしてやる！！

## 六章 にせ工作人員

まず陳はK駅でおり、情報センター前でTを待った。  
Tは深夜9時に、センターにきたところを、ガツンと、木のバットの改造した棍棒で気絶させた。  
顔に簡単な変装をかけ、『ハ°レタT』です。と、門の前でいった。  
警備をぬけて中に入る。

受付もカードと顔を照合できない距離にして『こんばんは』と突破。  
あとはエレヴェータに乗って、4階のトイレにかくれた。

一瞬だけが勝負だ。

深夜のハ°レタは10時にマシン室に入るが、残って仕事しているのがいる。  
顔をしられてるからな。  
深夜12時まで待とう。

## 七章 近くとも遠からず

今辞めたばかりの陳は過去の自分はしられてない。  
陳はしられざる拳法を継承していた。  
歴史から消え去って中国の拳法。  
当て身の理合いは日本の柔術にちかい。  
なぜ？と理由もわからぬまま辞めたばかりで、今は鬼と化していた。

12時に走り出、マシン室のゲートをカードでぬける。  
と、次のドアもなにくわぬ顔でぬける。

ぱったり会った、驚いたSを当て身で気絶させる。  
一瞬の荒業、しまりかけたドアになげこむ。  
Sの押していた帳票の台車をゆうゆうと運ぶと、  
TがACカードをとられて探しているという話が聞こえてくる。

I/Oエリアに入ると、敵が4人いた。

敵にしかみえなかった。

ゴン！！と、台車から20箱おとしてひとりやっつけた。

次のやつは蹴飛ばしてインパクトプリンタに当たって気絶した。

まんやかに飛び込むと、走ってる4000型プリンタに頭から突っ込ませる。  
さいごのひとは脚払いで自ら床にあごをうちつけた。

『いそがねば』  
陳はコンソールにむかった。

## 八章 最悪の結末

陳はちょっと間をあげ、  
あの時のコマンドを叩き、ジョブを解放した。  
たちまち、二つの系のMVSがおちた。  
H系は外れているのでおちない。  
オンラインオペレータが取り巻いてきて彼をとりかこむ。  
直に調査が入るだろう。

トルネードジョブについてはどうなるかはわからない。  
しかし、彼は狂喜していた。

敗北から、証拠不十分で執行猶予くらいにはなるだろう。  
彼は勝ったのだ。だれにも勝ち得ない勝負に勝ったのだ。

ごていねいにもRクラスがじゃむってやぶけた。なにかをしってるかのように。

*END*

## A 3 ストックホームの亡霊

<http://p.booklog.jp/book/99892>

著者：インチ・バイ・インチ

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/beroman/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/99892>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/99892>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ